

日本語教育史(1)

外国人と日本語

高見澤 孟

はじめに

ある人たちが他の言語を学ぶのは、それなりの理由がある。古代から交易、外交、学術研究、宗教的布教、時には、戦略目的、占領地支配など、さまざまな理由で外国語が学ばれてきた。アジア大陸の東端に位置する辺境の日本列島も歴史の展開のなかで海上の道をたどって外国人が訪れ、意図的な、あるいは、非意図的な異文化折衝の過程で言語的な学習や転移が行われてきた。

日本語がどのように形成されてきたかは、未だ不明の点が多い。日本語の系統を辿る研究も数多くの同根語(注1)を主張してきたが、印欧語のように祖語を明らかにするには至っていない。言語類型から同じ膠着語に属する韓国語の場合でさえ、基礎語の類似性から判断する言語年代学の研究では6千年以前に分離した言語(注2)とされるなど、日本語の系統は日本人の起源などとも絡んで曖昧なままである。

地理的な関係で日本は、大昔から危険な航海によって東アジアの中国、朝鮮の文化が伝えられ、それに伴う細々とした文物の伝播や日本からの進貢が行われていたが、各種技術者や朝鮮半島からの亡命集団などの渡来もあり、わずかではあるが、母語話者でない人々の日本語学習が行われていたものと思われる。

このような古代から始まった交流を通して外国人は、日本語をどのように学び、どのように見てきたのか、また、日本人はそれに対してどのような協力をし、日本語の普及に努力したのか海外資料をも検証して新たな検討を加えようと考えている。

第一章 東アジア諸国の日本語研究

日本が歴史に登場するのは、東アジアの小国として中国へ進貢したことの中国側の記録である。中国の史書は、ある王朝が倒れた後、次の王朝の史官が前王朝の歴史を記録するので、書名と記録された時点とに時間的な差があるのが通例であるが、日本が明確な記録として中国の史書に現われるのは、『漢書』の「地理志」であり、弥生前期(前1世紀)の日本を「倭国が百余国に分立している」と後漢(BC25~220)の班固と班昭が記述している。さらに、後年の宋時代に書かれた『後漢書』の弥生中期(1世紀, 2世紀)の記録には、「倭奴国が光武帝(在位AD25~55)朝貢」、「倭奴国に金印授与」などが見られる。

1-1 「魏志倭人伝」の日本語

古代の中国資料のなかで最も多くの情報が盛り込まれているのは、弥生後期（3世紀）の日本について晋の陳寿が記述した『三国志』の「魏書」の「東夷伝」、いわゆる「魏志倭人伝」であり、ここには当時の日本語を漢字で音写した地名や官職名、人名が記載されている。

これらは、朝貢のために来訪した日本人の発音を漢字の字音で表わしたもので、聞き取りの段階でも正確さに疑念があり、さらに中国語の音の変遷などもあって、現在では3世紀の日本語を推し量ることは難しいが、『古事記』や『日本書紀』の記述と類似した官職もあり、さらに現代の地名で比定できるものもかなりあるので、邪馬台国の所在地論争を賑わしている。

<「魏志倭人伝」に現われた日本語>

「魏志倭人伝」の表記	推定される読み方	該当する可能性のある日本語
〔地名〕		
対海	とま	つしま（対馬）
末廬	まつら	まつうら（松浦）
伊都	いと／うた	いと（糸島）？
斯馬	しま	しま（志摩）？
邪馬台	やまゆつ／やまたい	やまと（大和）？
－以下略－		
〔官職名・人名〕		
卑弥呼	ひむか／しみこ	ひみこ（姫命／日向）？
難升米	なにそぐむ／なしめ	？
卑狗	ひこ	ひこ（彦）
卑奴母離	ひなもり／ひなもら	ひなもり（夷守）

表音文字ではない漢字で外国語の音を写すのが難しいことは、明治時代の日本人が苦勞して英語の語彙を漢字化したのが原語とは程遠い発音（注3）で日本人の間に定着してしまったことからわかる。

1-2 日本語学習者の出現

日本の歴史資料に記載されている外国人日本語学習者としては、『日本書紀』の「天武天皇9年11月24日（AD681年）」の項に新羅から習言者（ことならひひと）3名の渡来が記録されている。この「習言者」については、「日本語を習うために来日した言語留学生」（古典文学大系 68）という説と「言語をすでに習得し、通訳、翻訳に従事する役人」（古典文学全集 5）とする説とがあるが、いずれにしても日本語を学んだ新羅人の来日を記録したことになり、朝鮮半島における日本への関心の高まりの証拠とも思える。

7世紀の日本は、聖徳太子の遣隋使で始まり、隋の滅亡後は後継王朝の唐への遣唐使派遣に引き継がれ、さらに朝鮮半島の百濟、新羅、高句麗とも交流が深まり、それら三国からの渡来人、帰化人が増えていた時代であった。唐と新羅の連合軍の攻撃を受けた百濟を救援するために出兵するなど、大陸、半島に深くかかわるようになっていたこともあって、遣唐使に随行する学生や僧侶などの中国語学習が進む一方、中国や朝鮮半島における日本語学習も行われるようになってきたのである。663年に滅亡した百濟からは多数の亡命帰化人が渡来し、さらに668年の高句麗滅亡による帰化人の渡来も

続き、文化的な影響とともに言語的な交流も行われてきた。

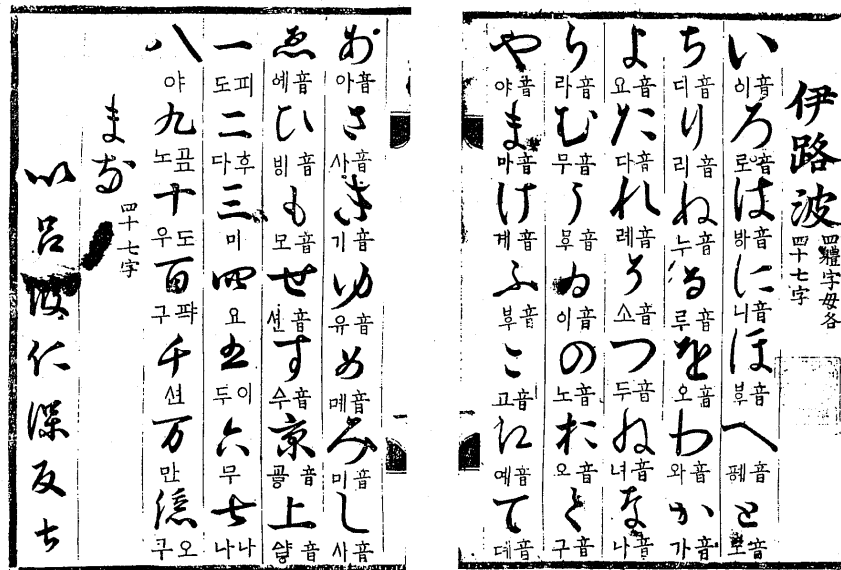
その後も、日本と大陸や朝鮮半島との交流は、外交面でも公的、私的な交易でも断続的に行われてきたが、14世紀には倭寇の侵攻が盛んになり、15世紀には勘合貿易や倭寇制圧のための外交交渉が頻繁に行われるようになり、1414年には李朝朝鮮がその司訳院において日本語教育を正式に開始することになった。

1-3 最初の日本語教材

現存している最古の日本語教材は、朝鮮司訳院が開発した『伊呂波』で、出版は1492年とされている。『伊呂波』は、日本語と日本文字を紹介するための教材で、まず題名通り、平仮名の「いろは」の各文字にその読みとして表音文字のハングル(注4)をつけ、文字や単語、文章を教えるテキストとして司訳院の日本語通訳の正規教材であったとされているが、どのように使われたかは、現在のところわかってはいない。

『伊呂波』は、1446年の世宗王によるハングル文字の公布後の日本語教材であったので、注釈されているハングル文字から当時の日本語の発音を知ることができる。ここでは、日本語のチ・ツが破擦音になっていないことがハングル文字によって示されている。

[参考資料 1] (以下、参考資料1-4の出典は、沖森卓也編『資料 日本語史』おうふう1991年に拠る。)



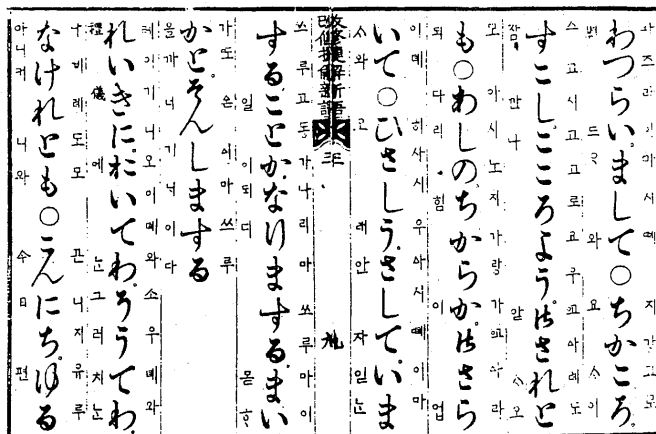
1-4 その後の朝鮮における日本語教材

日本と朝鮮の関係は、その後2回にわたる豊臣秀吉の朝鮮侵攻(1592年, 1597年)で険悪な関係が続いたが、日本側からは戦乱の時代に捕虜として日本へ移送された学者や各種技術者を通して新しい文化や技術の伝播者としての朝鮮が評価され、日本人の来訪も増え、朝鮮側にも日本語学習の気運が高まってきた。その時代に朝鮮で開発された代表的な日本語教材としては、次の3種があげられるが、いずれも日本語の発音をハングルで示してあるので、当時の日本語の研究資料としての価値も高い。

○『捷解新語』 全10巻

著者の康遇聖（1581年～没年不明）は、朝鮮の役（1592～98年）で捕虜となり、日本へ連れて来られて、10年間滞在し、その間、日本語が堪能になっていた。釈放されて、帰国した後、司訳院の通訳官になり、再三日本を公式訪問するなど、両国間の外交業務に従事し、当時の朝鮮きっての日本通として知られていた。『捷解新語』の内容は、両国の役人が外交交渉で行う対話の学習が中心であり、極めて実用性の高い司訳院の日本語教材として1676年に刊行され、改訂を加えつつも再版を重ね、19世紀末まで使用されていた。対話の表記は、平仮名が用いられ、段落ごとにハングル文字での読みが付けられているので、日朝対照研究の言語資料としても貴重なものとされている。日本語のハ行子音が両唇音であったことがハングル文字で示されている。

[参考資料 2]



○『倭語類解』 全2巻

洪舜明（1677年～没年不明）が1780年頃刊行した「日本語朝鮮語対訳辞書」で、「天文」「時候」「干支」「地理」「身体」「言語」「語辞」「官職」などの項目別に約3,400語を収録しているが、日本語の語彙に読みも意味もハングル文字での注釈があり、さらに、付録部分に「口訣」として日本語の助詞や「サッサレイ」とか「イタシマシタニヨリ」といった慣用表現も紹介しているので、現在の日朝両語の音韻史的研究、語彙史的研究の面でも注目されている。関正昭の『日本語教育史研究序説』（スリーエーネットワーク 1997年）によると、作成に当たっては、日本人の雨森芳州（注5）の協力があったといわれている。

○『隣語大方』 1巻

朝鮮では、その後、1790年には崔麟齡が『隣語大方』を刊行したが、これは日本側の朝鮮語通詞、雨森芳州が対馬で編纂した朝鮮語学習書を日本語学習用書き直したもので、商談に必要な文例を500種以上収録し、さらに商用書簡文の用例なども記載されている。

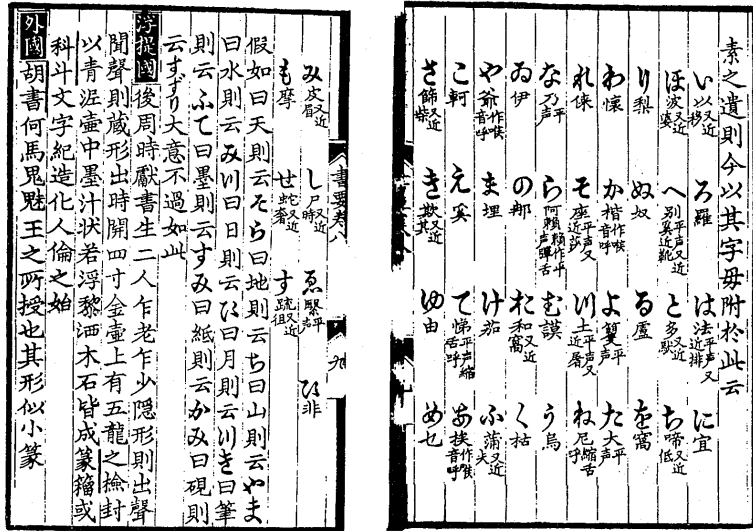
1-5 中国の日本語教材

明朝の中国では、16世紀に倭寇の侵攻が頻繁になり、その対策の一環として日本を知るための日本研究が注目を浴び、日本語の辞書などが刊行されたが、朝鮮ほどの本格的な発展は見られなかった。16世紀ごろ中国で刊行された日本関係の研究書としては、次の4種が有名である。

○『書史会要』 9卷, 補遺1卷

陶宗儀の編纂により1376年に成立したといわれているが、この『書史会要』は、中国古代の三皇時代から元代までの能書家の書風、字体を解説したものであるが、巻8の外国関係の部において日本の「いろは」の記載があり、それぞれの字 (=音節) に陶宗儀による中国語の音注がある。それによると、チ・ツは、[ti], [tu] であり、ヂ・ヅは、[di], [du] になっていて、現代日本語のような破擦音になっていないことが示され、ハ行子音も両唇摩擦音 [Φ] であったことが推察できる。

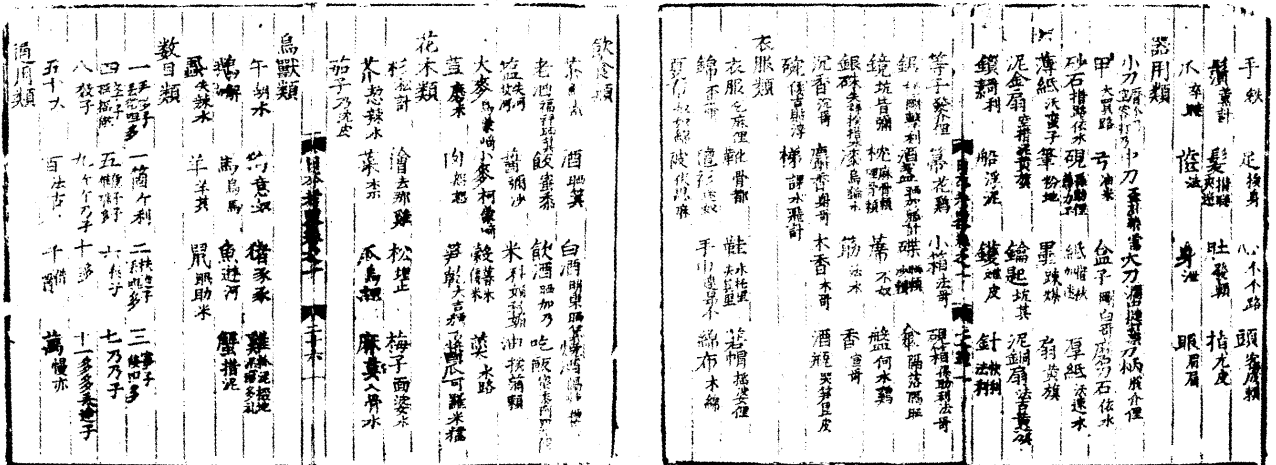
[参考資料 3]



○『日本寄語』 1巻

薛俊 (生年, 没年不明) が編纂した語彙集で、日本紹介書『日本国考略』の一部「寄語略」が分離されて、1523年ごろの刊行とされていたものであるが、原本は現存していない。『日本寄語』では、「天文」、「時令」、「衣服類」、「飲食類」など15部門に分けて当時の日本語363語が収録されているが、日本語の発音は、漢字音で音写されている。ここでは、チ・ツに当てられている漢字音は破擦音であり、日本語のチ・ツが破裂音の [ti], [tu] から破擦音の [chi], [tsu] に変化していく時代を反映しているといえる。

[参考資料 4]



○『日本館訳語』 1巻

著者は不明であるが、中国人通訳官養成用教材として明代に編纂された『華夷訳語』13巻の中の1巻であり、日本語は566語と語句が収録され、中国語による音写と訳語が付けられている。記載されている語句として関正昭(1997年)は、以下を例示している。

- 天晴 → 唵喇那法里的(ソーラナハリチ)
- 落雨 → 阿密福祿(アマホル)
- 写字 → 開的(カイチ)
- 読書 → 福密約密(ホミヨミ)

○『日本一鑑』 全16巻

鄭舜功(生年、没年不明)が1565年に編纂した日本研究書で、日本の歴史、文物、風俗、習慣、言語など、百科事典的に網羅してあった。編者の鄭舜功は、1556年に倭寇説諭の目的で九州豊後の大友義鎮を訪ねたが、その際の6ヵ月におよぶ日本滞在によって日本の事物に実際に接した経験もあり、また、日本人の協力者もあったようで、収録内容は多岐にわたっていた。言語に関する部分では、3,404語を収録しているが、語彙紹介は、次のような辞書的な体裁で提示されている。

- 聞 → 気固(キク)
- 卑 → 易耀世(イヤシ)
- 蔽 → 易太歪路(イツクシ)
- 勞 → 易佳歪路(イカワル)

このように15世紀から17世紀にかけて東アジアの隣国が次第に日本に対する関心を高め、徐々にではあるが、日本語の学習が行われるようになってきたが、同じ頃に日本語学習を始めたキリシタンの宣教師たちは、ラテン語研究の手法を応用した日本語の分析によってまったく新しい日本語像を形成していった。

第一章 後注

注1 - 日本語の系統

日本語の系統を探る研究は、明治以降盛んになり、多くの学説が主張されたが、いまだに解決を見ていない。現在までに日本語の系統として主張されてきた言語は、以下のようである。

<北方アジアの諸言語に系統を求める学説>

- ①アルタイ語、あるいは、ウラルアルタイ諸語に属するとする説
- ②朝鮮/韓国語との関連を主張する説
- ③アイヌ語との関係を主張する説

<南方アジアの諸言語に系統を求める学説>

- ①マライ・ポリネシア語に属するという説
- ②チベット・ビルマ系言語と関連するという説
- ③インド南部、タミル語との系統を主張する説

<印欧語と結び付ける学説>

- ①インド・ゲルマン語に系統を求める説
- ②ヨーロッパ諸語との関連を探る説

注2 - 日本語と朝鮮語の言語年代学

故、服部四郎は、著書『日本語の系統』（岩波書店、1959年）でスワデッシュ（Morris Swadesh, 1909-1967）の基礎語彙表を応用した両語の比較から日本語と朝鮮語の分離時期を6,000年前と計算している。

注3 - 外国語の音写

明治時代の日本人は、文明開化の流れの中で押し寄せてくる外国語を日本語化したり、音写したりして、新しい言語とその思想を自己のものとしていった。その例としては、Americaを「亜米利加」としたり、clubを「倶楽部」としたりするのが挙げられるが、音韻システムの異なる二つの言語の間でこのような音写を行うとかえって母語話者にはわかりにくくなるのも事実であって、日本語を中国人が漢字音で表わしたものが原語である日本語の発音とかけ離れたものになることは、当然であるといえる。

注4 - ハングル（文字）

1446年に李朝の世宗の命令で開発され、朝鮮固有の文字として公布された表音文字で、母音11と子音14の記号の組み合わせで朝鮮語のすべてを表わすことができる合理的な文字でもある。諺文（おんもん）ともいう。

注5 - 雨森芳州（あめのもり ほうしゅう 1668年～1755年）

江戸時代中期の朱子学派の儒者。対馬藩に仕え、文教を司り、さらに朝鮮語、中国語に堪能であったことから、外国との交渉にもかかわり、通訳の養成や朝鮮語学習書の開発も手がけ、さらに朝鮮、中国の日本語教材開発にも協力していた。

第一章 参考文献

- 沖森 卓也編 『資料 日本語史』 おうふう 1991年
杉本 つとむ著 『西洋人の日本語研究』（杉本つとむ著作選集 第10巻） 八坂書房 1999年
関 正昭著 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク 1997年
服部 四郎著 『日本語の系統』 岩波書店 1959年
水野 祐著 『日本古代の国家形成』 講談社現代新書 1967年
平凡社編 『世界百科事典』 平凡社 1958年

（たかみざわ はじめ 日本語日本文学科）